

語り語られる服。

語り語られる服。

COLLECTION 2019
STYLE BOOK

VOL.
001

特集：
渋谷区桜丘町



- 語服 in 渋谷区桜丘町 -

私たちは“身につけるもの”がもつ表現力や印象力に魅せられて、まちのお土産 T シャツを作ることにしました。

まちのお土産 T シャツと言っても、「NYC」と大きくプリントされたような“まちが主役”なものでも、そのお店やまちの収益のために作られたものでもありません。

“語服”T シャツが残すのは、変わりゆくまち、渋谷区桜丘町での思い出たち。太田・日下・高島のデザイナー trio が、このまちで感じた「この瞬間を残したい」という気持ちや「これを身につけていたらあのお店のファンに出会えるかも」と思った、モノ・コトを T シャツに表現しました。出来上がった全 7 店舗・21 枚の T シャツの中には多くの方に共感してもらえそうなものもありますし、とても個人的で誰にも理解されなさそうなものもあります。

ですがそれが“語服”をただのまちのお土産 T シャツとは違うものにする大きなポイントになっています。

私たちが作った「語服」は販売します。しかし、こちらでは値段は決めず、買い手のみなさんに決めていただきたいと考えています。なぜなら買い手の方が「語服」に残されたまちでの思い出に同じように価値を感じているのか、どれくらい共感してくれるのか、そして買い手の中でもどのように違っているのかに興味があるからです。

是非、T シャツを手に取り、デザインを見て、私たちとおしゃべりをしてください。その中で「この思い出を来てまちを歩きたい、この思い出を大事にタンスの中にしまっておきたい」そんな風に思える 1 枚がもし見つかりましたら、是非持って帰ってあげてください。

2019 年 春
語服

あおい書店のみんな
みんな見守ってる。



左. 上から見ると、大きな台形のように
なっている、「あおい書店」前の段差。
少し高さがあるそれは、そこに腰掛けて
足をブラブラさせるのにちょうどよかつた
思い出。そこから眺める桜坂の活気と
進みつつある開発の影の両方を感じたこと
を表現したくてつくりました。(日下)
中央. 桜丘町のシンボルとなっているか
のような圧倒的な存在感のロゴ。幾度と
なく桜丘の集合場所として人々を送り出
したことでしょう。このロゴを見て思う
気持ちは人それぞれ、そんなたくさんの
思い出がつまったあおい書店のロゴを表現
できたらという思いでこのTシャツを
デザインしました。(高島)
右. 私のあおい書店の思い出はお店の外
にあります。それは、246を越える歩道
橋の階段を桜丘の方に向かって降りると
見える景色です。写真ではなくイラスト
にすることで、夜・昼だったなど、多く
の人に自分自身が見た景色に当てはめて
見てもらいたいという狙いがあります。
(太田)

あの頃と今とが心地
変わらないう味。



左・店内に入る前に、びっしりと並ぶ食品サンプルが印象的な「かいどう」。初めて訪れた時に、そこからどれにしようかと、友達と顔を寄せて悩んだのが私にとっての思い出。だからこそ、そのワクワクと懐かしさの両方が詰まるそのショーケースを残しておきたくてこの一枚を作りました。(日下)

中央・お店に入ったことがある人ならきっと目に入っているであろう、入り口の段差プレートをそのまま胸にデザインしました。いらっしゃいませと文字で書かれた段差プレートは私は「かいどう」以外では見たことがありません。これをチョイスしたお店の方の気持ちも想像してほっこりする、そんな思い出も残したいと思いました(太田)右・渋谷駅から桜丘に入るとすぐの場所、そこには誰にとっても懐かしさを感じる定食屋さんがありました。どんな人でも一口食べればほっこりできる定番のチャーハン、それを食べた瞬間を表現できればと、このデザインを描きました。(高島)

Hamburger & Beer Diner TURTLES

次はどこ行くの
そんな会話を
ボリュミーな
ハンバーガーとともい。

左：タートルズに行ったことがある人ならきっと見覚えがあるだろうあの後ろ姿と、「(net)surfing turtle」の文字を組み合わせでデザインしました。初めて見た時にはびっくりしたけど、今ではネットサーフィンをしていないお店の方を見ると「忙しいのかな、大丈夫かな」と心配してしまいます。お客さんも店員さんも、カメのようにマイペースに時間を過ごすあの空間へ、愛を込めて。(太田)

中央：何時間もお邪魔して作業していると、店主から「これどうぞ、」の一声。ホットコーヒーのサービスを頂いた。そのコーヒーをきっかけに、すっかりこのお店のファンになってしまった私たちは、ランチは基本 TURTLES。店主はいつも同じ調子だけど、実は「あ、また来たな。」なんて思ってるかもしれない。(高島)

右：一度食べたら忘れられない要素がたくさん詰まっている看板メニュー、タートルズバーガー。ミートソース付きのジューシーなお肉と分厚いトマト、プリプリのエビが頭から離れなくて。ああ今日も食べたくなくなってきた！(日下)

言迷の扉、
地下フロア、
秘密基地めにいざ
わくわく...

左：よくある洋風なフリーイラストのイメージでカフェのテーブルセットとコーヒーを飲む外国人風の男の人を描きました。だけど、その場所にはしれっと用途不明なエレベーターがある。エレベーターを誇張したりせずそのまま描くことでドトル桜丘町店のチェーン店然とした安定感を表現したいと思いました。(太田)

中央：そこを訪れたのは10月も半ばになるのに初夏のような暑い日でした。その店内で衝動的に半袖に着替えたことや、作業しなければならないのに大きなカップのロイヤルミルクティーを飲んで落ち着いてしまったこと、「使われていないエレベーター」を発見したこと。全てが相まって「？」な一日だったので。(日下)

右：チェーン店、しかしその生き様はローカル。すっかり桜丘の景観のひとつになっているDOUTORも、10月いっぱいまで閉店してしまいました。桜丘をずっと見守ってきたその佇まいをこれからも思いだせるように、そんな気持ちを込めました。(高島)

Lemon Rice TOKYO

「今日はやっぱり」
不定期はお店を
ついでにしよう毎日。

左. 桜丘にちょこんと顔を出すレモンライス屋さんはなんだかとても可愛らしい。メニュー、見た目、店員さんなど、その小さいお店の中にはたくさんの魅力がぎゅっと詰まっています。カウンターに置かれたピン詰めをモチーフに、このお店の魅力を詰め込んでみました。(高島)

真ん中. 昼間のレモンライスではなく「夜のレモンサワー屋さん」こそが私にとってのあの店です。サワーの炭酸がしゅわしゅわ弾けて空に飛んでいくような短い時間の中で、カウンターに立っているお姉さん・お兄さんと他愛もない話をしてゲラゲラ笑う。側から見たら酔っ払いの集まりに見えるかもしれませんが、私はこんな夜って青春かもしれない、とよく思います。そんな気持ちをイラストに込めました。(太田)

右. 上京して三年目になる私に初めてできた、東京の安心できる場所。帰る前に「誰かいるかな～」と顔を出しに行くのが、渋谷を訪れたときの習慣になりつつある。お酒落で格好良いのに気取っていない、お兄さんとお姉さんを表現しているようなこのフォントを残しておきたい。(日下)

レモンライス

253号

左. ここ trias で生まれて初めてこんなに美味しいラムを食べたのが、忘れられなくて。その時に店長からお伺いした、食材・インテリア・カラトリーなど口へ運ぶまでの過程への拘り全てを表現してみました。(日下)

真ん中. ある時、すごく落ち込むことがあった後に trias にきて夜ご飯を食べました。疲れた、明日は何もしたくない。そんな気持ちを解消して、元気をチャージさせてくれたのはここで食べた美味しいムール貝と、スタッフの方との会話でした。[need gas?] 元気が無くて、チャージしたい? それならいつでもここに来たらいいよ。そう言ってくれているような気がしました。モチーフは、お店で各テーブルに置かれているランプです。(太田)

右. trias さんには何回もお邪魔し、このプロジェクトを支えていただいています。いつ出会いに巡り会えるかどこに発見が潜んでいるか、誰にもわからないけど、そこが面白い。そんな挑戦的な姿を感じます。料理は勿論、店員の方々も含めて、このお店が大好きです。プロジェクトが終わっても、通い続けさせていただきます。(高島)

スタイリッシュの裏の情熱。

左・桜丘の坂を登った先にあるこのお店。不思議な雰囲気の人々を惹きつけている。安定しない手書きフォントの看板だったり、不揃いなインテリアだったり、ん？逆にこだわり抜かれている…？仕事に疲れた都会人たちがゆっくりと時間を過ごす、他にはない空間を提供している佇まいを表現しました。(高島)

中央・初めての渋谷ハロウィンでの服装は、「パリジャン」だった私たち。ベレー帽とフランスパンを片手に店先を歩けば、本物のパリにいるみたいな気分になったっけ。そんな浮き足だっている私たちをデザインしてみました。(日下)

右・私がもし桜丘で友達とご飯を食べるとするなら、桜丘カフェがいいかなと思います。ご飯もお店の雰囲気が良くて、名前に「桜丘」が入っているということもありますが、場所がとてもわかりやすいということもあります。[You'll see sparkling rain on your right.] はまさにそのシチュエーションを想像した時に思い浮かんだフレーズ。きっとその友達もお店を実際に見れば、このフレーズを理解してくれるんじゃないかなと思います。(太田)

坂を登ると、
そこにはゆるーい
カフェがある。





PHOTOGRAPHER
MASAYA KIMURA

DESIGNER/EDITOR/MODEL
FUMI OTA MAO KUSAKA SHUJIRO TAKASHIMA



<https://gofuku.style>